



「耳順」「杖郷」「花甲」などの語：
六十歳・六十一歳を表す語と漢詩

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007274

「耳順」「杖郷」「花甲」などの語

—六十歳・六十一歳を表す語と漢詩—

後 藤 秋 正

はじめに

「還暦」という語が、数え年で六十一歳を指すことはよく知られている。では、この語は漢詩の中で、どのように用いられているのであろうか。ふと思いついていくつかの辞書を調べてみたが、『漢語大詞典 修訂版』には、この語自体が見られない。

『諸橋大漢和辞典』は、「ほんげがへり。本卦回。再び其の生年の干支にたちもどる。六十一歳をいふ。華甲。周甲。華甲子。」と説明するものの、用例は挙げない。では、この語は日本製漢語なのであろうか。『日本国語大辞典 第二版』は、「数え年六一歳の異称。六〇年で再び生まれたときの干支に還るところからいう。華甲。本卦還り。」として、以下のような用例を引いている。

* 音訓新聞字引 (1889) 〔秋原乙彦〕「還暦 クワンレキ トシ六十一ヲ云」 * 改正増補和英語林集成 (1886) 「Kwanreki クワンレキ 還暦」 * 左千夫歌集 (1920) 〔伊

藤左千夫 明治四二年「還暦の祝を挙ぐと聞きて」

これらの用例から考えると、「還暦」の語は、日本で、それも明治に入ってから用いられ出したようだ。では、漢詩において、「還暦」に類する語はどのように表れるのであろうか。

一 六十歳と六十一歳の異称

中国においては、六十一歳を指す語としては、『諸橋大漢和辞典』と『日本国語大辞典』に見えたように、もっぱら、華(花)甲、周甲の語を用いるようだ。このほかにも、六十一歳を「元命」と称した例もある。『諸橋大漢和辞典』は華甲について、「六十一歳。華の字は十の字六箇と一の字とから成るからいふ。甲は甲子の甲。還暦。花甲。」と説明し、范成大の詩を引いている。ただし、五十歳、六十歳といった人生の節目となる年齢について述べることは、しばしば見られる。『論語』為政篇の次の一文はその中で最もよく知られたものである。

子曰、吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而

知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩。

子曰く、吾 十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順かみう。七十にして心の欲する所に従いて、知を踰えず。

ここから、孔子が他人の意見を素直に聞き入れられるようになったという六十歳を「耳順」と言うようになったことも周知のことである。また、『礼記』王制篇には、次のように言う。

五十異糧、六十宿肉。……六十歲制、七十時制。……五十杖於家、六十杖於郷、七十杖於国、八十杖於朝。……五十不従力政、六十不与服戎。……五十而爵、六十不親学、七十致政。唯衰麻為喪。

五十は糧を異にす、六十は肉を宿にす。……六十は歳に制し、七十は時に制す。……五十は家に杖つき、六十は郷に杖つき、七十は国に杖つき、八十は朝に杖つく。……五十は力政に従わず、六十は戎に服くに与らず。……五十にして爵す、六十は親みかか学はず、七十は政を致す。唯だ衰麻のみ喪を為す。この一節は、六十歳以上の老人が待遇の上で得る、さまざまな恩典について述べている。ここから、六十歳のことを「杖郷」とも言うようになった。ではこれらの語を用いている詩には、どのようなものがあるのだろうか。以下、「耳順」「杖郷」「花甲」など、六十歳、もしくは六十一歳を指す語を用いている何篇かの詩を見てみたい。

二 「耳順」

「耳順」は、詩ではないが、曹植「卞太后誄」(『曹子建集』卷九)にすでに見えている。

我后齊聖、克暢丹聰、不出房闥、心照万邦。年踰耳順、乾乾匪倦。

我が后は齊聖にして、克よくく丹聰暢あきび、房闥を出でずして、心は万邦を照らす。年 耳順を踰ゆるも、乾乾として倦うみに匪ず。

魏の卞太后は曹植の母。後漢の桓帝の延熹三年(一六〇)十二月に生まれ、没したのは魏の明帝の太和四年(二三〇)五月であるから、享年は七十一。これを「耳順を踰ゆ」と表現したのである。

詩において「耳順」の語が見えるのは、白居易の詩が早いものである。白居易には「耳順吟、寄致教詩夢得」(『白氏長慶集』卷二一、『全唐詩』卷四四四)がある。

三十四十五欲牽 三十四十五欲牽き

七十八十百病纏 七十八十は百病纏う

五十六十卻不惡 五十六十は卻かえつて悪しからず

恬淡清浄心安然 恬淡 清浄 心安然たり

已過愛貪声利後 已に愛貪・声利を過ぐる後

猶在病羸昏耄前 猶お病羸・昏耄の前に在り

未無筋力尋山水 未だ筋力の山水を尋ぬる無くんばあらず

尚有心情聽管絃 尚お心情の管絃を聴く有り

間開新酒嘗數盞 間に新酒を開きて數盞を嘗む

醉憶旧詩吟一篇 酔いて旧詩を憶いて一篇を吟ず

敦詩夢得且相勸 敦詩・夢得 且つ相い勸む

不用嫌他耳順年 用いず耳順の年を嫌他するを

この「耳順吟」と題する詩は崔群、字は敦詩と劉禹錫、字は夢得に寄せたものである。「五欲」は、いくつかの説があるが、例えば仏教で言う色欲・声欲・香欲・味欲・触欲。「嫌他」は、いやがる、きらう。六十歳は欲望に囚われることもなくなり、かといって病気がちになる年齢でもない。山水を尋ね歩いたり、音楽を楽しんだりすることもできる、ほどよい年齢なのだから、これをいやがることはない、と云うのである。白居易が六十歳を迎えたのは、大和五年（八三二）、河南尹として洛陽において半ば隠居生活を送っていた時であった。この詩に和して白居易と崔群に寄せたのが劉禹錫「和楽天耳順吟、兼寄敦詩」（『劉賓客文集』外集卷二、『全唐詩』卷二六〇）である。

吟君新什慰蹉跎 君が新什を吟じて蹉跎たるを慰む

屈指回登耳順科 指を屈して共に耳順の科に登る

鄧禹功成三紀事 鄧禹 功成る三紀の事

孔融書就八年多 孔融 書就るより八年多し

已經將相誰能爾 已に將相を経ること誰か能く爾せん

抛却丞郎爭奈何 丞郎を抛却すること争でか奈何せん

独恨長洲數千里 独り恨む長洲は數千里

且隨魚鳥泛烟波 且く魚鳥に隨いて烟波に泛かぶを

この詩を書いたのは劉禹錫が刺史となつて蘇州に赴く途中、

洛陽の白居易のもとに、十五日ほど立ち寄つた時であつた。彼は崔群・白居易と同じ年である。第二句は耳順に達したことを

科挙の登第になぞらえて言う。鄧禹は後漢の光武帝の天下平定を助けて功績があり、光武帝が即位した建武元年（二五）、大

司徒に任じられたときには二十四歳だつた。一句は鄧禹が大司徒になつた歳より遅れること三紀三十六年で耳順に達したことを言う。孔融は「論盛孝章書」（『文選』卷四一）の冒頭に、「歳

月不居、時節如流。五十之年、忽焉已至、公為始滿、融又過二。」（歳月は居らず、時節は流るるが如し。五十の年は、忽焉として已に至り、公は始めて滿つることを為し、融は又二を過ぐ。）と書いた。一句は孔融が書簡を書いた年齢を八歳過ぎたことを

言う。白居易はゆとりをもつて六十歳を迎えているが、「丞郎」の地位を去り、長安から洛陽を経て蘇州に赴く劉禹錫には、不安もあつたに違いない。蘇州に着いたのは翌大和六年二月のことである。崔群はこの年の八月に没している。彼が二人に寄せた詩は残っていない。次に徐夔（真）の「新屋」（『徐正字詩賦』

卷二、『全唐詩』卷七〇九）を見よう。この詩には「時年六十。」（時に年六十）という自注がある。

耳順何為土木勤 耳順 何為れぞ土木の勤えあらんや

叔孫墻屋有前聞 叔孫の墻屋は前に聞くこと有り

縱然一世如紅葉 縱然 一世 紅葉の如きも

猶得十年吟白雲 猶お十年 白雲に吟ずるを得ん

性逸且圖称野客 性は逸にして且つ野客と称さるるを図り

才難非敢傲明君 才は難くして敢えて明君に傲るに非ず

清甜数尺沙泉井 清甜 数尺 沙泉の井

平与隣家昼夜分 平らかに隣家と昼夜分かつたん

徐夔、字は昭夢は、唐末五代の人。昭宗の乾寧元年（八九四）の進士で、秘書省正字を授けられた。のち朱全忠の幕府に入ったあと、天復二年（九〇二）ころには故郷の閩（福建省）に帰り、後に閩を建国する王審知のもとで掌書記となり、また、泉州刺史王延彬の幕府にも入ったことがある。晩年は延寿溪（福建省莆田市の）の別墅に住み、ここで亡くなった。

この詩は詩題から考えて、六十歳になった時に、新たに別墅を建てたことを詠じたものであろう。「叔孫」の句は、「左伝」昭公二十三年の条に、「叔孫所館者、雖一日必葺其牆屋。去之、如始至。」（叔孫館る所の者は、一日と雖も必ず其の牆屋を葺く。之を去るとき、始めて至るとき如し。）とあるのに基づく。叔孫は邾の大夫、叔孫婼のこと。使者として晋へ行つたが捕らえられてしまう。しかし、彼は正義感に溢れていて潔癖であり、一日泊まったただだけの宿舎も、出るときには垣根や屋根を修繕し、始めに来たときのようにしたという。一句は、六十歳にもなつて、彼と同じようなことはできないと、言うのであろう。頷聯は、人生は紅葉のようにはかなくとも、この別墅であと十年は隱遁生活を送れるだろう、というのであろう。白雲は隱遁生活の象徴。尾聯は清らかで甘い泉水を隣家と分かち合つて味わうことを言う。

三 「杖郷」

「杖郷」の語が最も早く見えるのは、梁の任昉の「答到建安餉杖詩」（『芸文類聚』巻六九。全一六句）であろう。第七・八句に、

勞君尚齒意 君が齒を尚ぶの意を勞い

矜此杖郷辰 此の杖郷の辰を矜る

と言っている。詩題の到建安とは、建安（福建省建甌市の）太守であつた到溉のこと。彼から竹製の杖を贈られたことに感謝した詩である。しかし、任昉は、梁の武帝・蕭衍の天監七年（五〇八）に四十九歳で没しているから、この句も、到溉がからかい半分で、まだ老境に達しているとは言えない任昉に杖を贈つたことに対し、ユーモアを交えて「杖郷の辰」と言つたものである。

庾信の「園庭」（『庾子山集』巻四）の冒頭にも「杖郷」の語がある。

杖郷従物外 郷に杖つきて物外に従い

養学事閑郊 学に養われて閑郊を事とす

窮愁方汗簡 窮愁 方に汗簡し

無遇始親交 遇うこと無くして始めて交を親る

谷寒已吹律 谷寒くして已に律を吹き

檐空更剪茆 檐空しくして更に茆を剪る

樵隱恒同路 樵と隠と恒に路を同じくし

人禽或对巢 人と禽と或いは巢を対す

………

香螺酌美酒 香螺に美酒を酌み

枯蚌籍蘭穀 枯蚌に蘭穀を籍さかんにす

飛魚時触釣 飛魚は時に釣つに触れ

翳雉屢懸庖 翳雉も屢しば庖に懸かる

但使相知厚 但だ相知をして厚からしめば

当能來結交 当に能く來りて交わりを結ぶべし

庾信がこの詩を文字通り六十歳の時に書いたとすると、それは北周の武帝・宇文邕の建徳元年（五七二）陳の宣帝の太建四年に当たる。ただし、このころの庾信の官職は、はっきりしない。全体に庾信らしい多くの典故をちりばめた詩である。「養

学」の句は、『礼記』王制篇に、「五十養於郷、六十養於国、七十養於学。」（五十は郷に養い、六十は国に養い、七十は学に養う。）と言うのを踏まえて、国学で養われながら郊外で静かに過ごすことを言う。「窮愁」は、とりわけ強い望郷の思いを言うのであろう。静かな郊外で家の手入れをしたり、きこりや隠者と同じ道を歩いたりする。また、魚を釣ったりきじを捕らえたりする。末の二句では、多くの御馳走が用意されているのだから、きつと自分の心を慰める友人が訪ねてくれるだろう、と言う。果たして六十歳の庾信が友人を待ちながら郊外で隠者めいた生活を送っていたかどうか、定かではない。しかし、老境に近づくにつれ、南方に帰れない孤独を日増しに強く感じていったであろうことは容易に想像がつく。

唐詩においては、玄宗・李隆基の「千秋節宴」（『全唐詩』卷

三）にこの語が見える。

蘭殿千秋節 蘭殿 千秋の節

称名万寿觴 名を称す万寿の觴

風伝率土慶 風は伝う率土の慶

日表繼天祥 日は表す繼天の祥

………

処処祠田租 処処 田租を祠まつり

年年宴杖郷 年年 杖郷を宴す

深思一德事 深く思しう一徳の事

小獲万人康 小しく獲とる万人の康やすらかなるを

玄宗は睿宗・李旦の第三子。則天武后の垂拱元年（六八五）

八月五日、洛陽で生まれた。即位したのは延和元年（七一二）

八月のことである。千秋節は玄宗の誕生日を祝うためにもうけ

られた。『旧唐書』卷八、玄宗紀上、開元十八年（七三〇）の

条には、次のようにある。

八月丁亥、上御花萼楼、以千秋節百官献賀、賜四品已上金

鏡・珠囊・縑綵、賜五品已下束帛有差。上賦八韻、又制秋景

詩。

八月丁亥、上 花萼楼に御し、千秋節に百官 賀を献ずる

を以て、四品已上に金鏡・珠囊・縑綵を賜い、五品已下に束

帛を賜うこと差有り。上 八韻を賦し、又秋景の詩を制す。

「処処」の二句は、あちこちで農耕の神である神農氏をまつり、六十歳の老人をいたわりもてなすことを言う。

四 「花甲」

少なくとも宋代までの詩においては、「華甲」の語は見えず、もっぱら「花甲」が用いられるようである。「花甲」の語が表れる最も早い詩は、趙牧の「対酒」(『唐摭言』巻一〇、『全唐詩』卷五六三)であろう。彼については、大中(八四七―八五九)・咸通(八六〇―八七三)年間の人であり、科擧に合格せず、各地を放浪したことがわかつている程度である。詩もこの一篇だけが残っている。

雲翁耕扶桑

雲翁 扶桑を耕し

種黍養日鳥

黍を種えて日鳥を養う

手按六十花甲子

手てをある六十 花甲の子

循環落落如弄珠

循環 落落として珠を弄するが如し

長繩繫日未是愚

長繩もて日を繫ぐこと未だ是れ愚ならざらんや

有翁臨鏡捋白鬚

翁有り鏡に臨んで白鬚を捋かぐ

飢魂弔骨吟古書

飢魂 弔骨にして古書を吟なぐ

馮唐八十無高車

馮唐 八十にして高車無し

人生如雲在須臾

人生 雲の如くして須臾に在り

何乃自苦八尺軀

何すれぞ乃ち自ら八尺の軀を苦しめん

裂衣換酒且為娛

衣を裂き酒に換え且く娛しみを為さん

勸君朝飲一瓢

君に勸む朝に一瓢を飲み

夜飲一壺

夜に一壺を飲まんことを

杞天崩

杞天崩れて

雷騰騰

雷騰騰たらんや

桀非堯是何足憑

桀は堯に非ず是れ何ぞ憑るに足らん

桐君桂父豈勝我

桐君と桂父も豈に我に勝らん

醉裏白鷺多上昇

醉裏 白鷺 多く上昇す

菖蒲花開魚尾定

菖蒲 花開いて魚尾定まる

金丹始可延君命

金丹 始めて君が命を延ばすべし

「雲翁」は、『太平御覽』

卷九百六十に引く「神仙伝」に、「雲翁斬早莢樹、以杯承之、皆是好酒。」(雲翁 早莢樹を斬り、杯を以て之を承くるに、皆な是れ好酒なり。)という、さいかちの木(果実)から酒を得た仙人であろう。「日鳥」は太陽の異名。前漢の馮唐は、武帝の時に賢良に挙げられようとしたが、九十余歳になっていて、再び官に就くことができなかつた。「桐君」は黄帝の時の医師、「桂父」は伝説中の仙人。一篇は、六十歳の老境を迎えても、酒を飲んで悠々と過ごすことを言うのであるが、「菖蒲」の句は、菖蒲の花が開いて、周圍を泳いでいた魚の動きが落ち着くことを言うのだろうか。

唐詩に「花甲」はこの一例しか見えない。そこで、南宋末期から元の初期にかけての人、楊公遠、字は叔明の「借虛翁滄金門城望五詩韻以写幽居之興」(『野趣有声画』卷下)の冒頭の詩を引いておこう。「虚翁滄金門城望五詩」とは、元の方回、字は万里、号は虚谷の「湧金門城望五首」(『桐江統集』巻一〇)のこと。湧金門はもと呉越の杭州城の西門だった。南宋になって増築され、豊豫門とも称した。

数竿脩竹半池荷 数竿の脩竹 半池の荷

密掩柴門少客過 密に柴門を掩ざして客の過ぎること少な

筆底画能希李郭 筆底 画は能く李・郭を希うも

囊中詩欠似陰何 囊中 詩は陰・何に似たるを欠く

一心夜月炯長在 一心の夜月 炯らかにして長に在り

兩鬢秋霜積未多 兩鬢の秋霜 積むこと未だ多からず

花甲明年重數起 花甲 明年 數を重ねて起ころ

幸逢塵世息兵戈 幸う塵世 兵戈の息むに逢わんこと

楊公遠が五十九歳の時に書いた詩である。ただし、彼の経歴ははっきりしない。「初度 丙戌」(『野趣有声画』卷下)に、「今朝六十從頭起、數到稀年更有餘」(今朝 六十 頭より起つ、數の稀年に到るに更に餘り有り)と言うから、「丙戌」(元の至元二三年、「一二八六」に六十歳であったことがわかる。これからすると生年は南宋の理宗の宝慶三年(一二二七)ということになる。詩画に巧みで、終生仕えなかつたらしい。「李・郭」は、李膺と郭泰。「陰・何」は、陰鑑と何遜。「塵世」は、塵にまみれた世の中。ここは戦塵の漂う時代を特に指すのであろう。彼が五十九歳を迎えた前後には、元は日本や安南に対して出兵を繰り返しているから、世情は騒然としていたに違いない。文天祥も至元十九年(一二八二)十二月に殺されている。末句の、戦禍の終息を願う心情には切実なものがある。

五 「六句」「元命」「新甲」

これまで取り上げてきた詩のほかに、六十歳を「六句」と称

する例もある。このような用い方をするのは白居易の詩に始まるのであろう。「歳夜詠懷兼寄思黯」(『白香山詩集』卷三九)の起聯では、次のように詠じられる。

徧數故交親 徧く故交親を數うるに

何人得六句 何人か六句を得たる

詩題の思黯は、白居易よりも七歳年長で、宰相であった牛僧孺(七七九―八四七)のこと。六十歳を過ぎた友人は少ないというのは実感であっただろう。白居易が六十歳を迎えた大和五年(八三二)の七月には元稹が五十三歳で没している。また、「春夜宴席上戲贈裴淄州」(『白氏長慶集』卷三三)でも、「六句」の語を用いる。起・頷聯を引こう。

九十不衰真地仙 九十にして衰えざるは真の地仙

六句猶健亦天憐 六句にして猶お健なるも亦天憐

今年相遇鶯花月 今年 相い遇う鶯花の月

此夜同歡歌酒筵 此の夜 同に歡ぶ歌酒の筵

裴治は、白居易が太子少傅であった開成年間(八三六―八四〇)には、淄州刺史だった。生没年未詳。ただし、第一句の自注に、「裴年九十不衰羸。」(裴は年九十にして衰羸せず。)と言うから、白居易よりも高齢であったことは確かである。

宋代に入ると范成大(一一二六―一一九三)に、「丙午新年六十一歳、俗謂之元命、作詩自祝」(『石湖居士詩集』卷二七)があり、冒頭に、

歳復当生次 歳は復た生次に当たり

星臨本命辰 星は本命の辰に臨む

とあって、六十一歳を「元命」とも称したことが知られる。また、明の沈周（一四二七—一五〇九）には、「六十一歳自寿」（『石倉歴代詩選』巻四九二）があつて、還暦を新甲と言っている。その起・頷聯に、

重逢丁未開新甲 重ねて逢う丁未 新甲を開くに

過六十年増一年 六十年を過ぎて一年を増す

壽是尙來那必得 壽よわい 是れ尙もし来るも那なんぞ必ずしも得ん

や

人於末節要求全 人は末節に於いて全きを要求す

と言う。丁未は、憲宗の成化二十三年（一四八七）。『明史』巻二百九十八、隱逸伝によると、彼は長洲（江蘇省蘇州市）の人。しばしば仕官を求められたが一生仕えず、母への孝養を尽くすために遠出をしなかつたという。

終わりに

少なくとも中国においては、還暦の語が用いられた詩は見出すことができなかった。これまでに見てきた詩においても、詩人たちの多くは、六十一歳よりも、六十歳という年齢に達したこと、より強い関心を寄せていたように見受けられる。白居易のように、若いころの「愛貪」「声利」にとらわれる境地を脱し、六十歳になって「恬淡」「清浄」の境地に安然とできるかどうかは、個人差があるであろう。しかし、白居易が言っていたように、健康で六十歳に到達できること、それ自身が僥倖とも言えることは確かである。玄宗が「万人の康らかなる」こ

とを望み、楊公遠が「兵戈の息む」ことを願っていたように、誰もが健康で戦火のない時代を迎えること、このことこそが六十・六十一歳に達した詩人たちの、平凡ではあつても切なる願望であつたことは確かである。

(注)

1 全釈漢文大系『礼記』（集英社、一九七六）から、この部分の通釈を引いておく（一部改変）。「五十歳になると衰え始めるので、日常の食物は壮年の者と異にし、六十歳では常に肉類を備える。……六十歳になると、死後の用意をして、一年をかけて棺を作り、七十歳には三月をかけて重要な衣服を作る。……五十歳の者は家の中でつえを突き、六十歳は郷内でつえを突き、七十歳は国中でつえを突き、八十歳は朝廷でつえを突き。……五十歳になると夫役を免れ、六十歳には軍役を除かれる。……五十歳には爵を受けて大夫となり、六十歳には親しく学業を受けることはしない。七十歳には官位を君に返し、喪事も衰麻の喪だけに服する。」

2 趙幼文『曹植集校注』（人民文学出版社、一九八四）はこの誄の「耳順」の注に、「下太后於光和五年年二十、至太和四年死、計生年為六十九歳。故曰踰。」と言う。しかし、彼女が延熹三年に生まれたことは、『魏志』巻五、武宣下皇后伝に引く『魏書』に見えている。『曹植集校注』には誤解があるだろう。

3 例えば、時代は下るが徐夔「自詠十韻」（『全唐詩』巻七一

一)の末聯にも、「如今便死還甘分、莫更嫌他白髮生」(如今便ち死するも還た分に甘んぜん、更に白髮の生ずるを嫌他する莫かれ)とある。

4 白居易「花前有感、兼呈崔相公劉郎中」(『白氏長慶集』卷

二五、『全唐詩』卷四四八)の末聯に、「何事同生壬子歲、老於崔相及劉郎」(何事ぞ同に壬子の歳に生まれ、崔相及び劉郎より老いたり)の句があり、自注に、「余与崔劉年同、独早衰白」(余、崔劉と年同じきに、独り早に衰白。)と云う。

「壬子」は、代宗の大暦七年(七七二)。

5 彼の別墅を詠じた詩には、他にも「新葺茆堂」(『徐正字詩賦』卷二、『全唐詩』卷七〇九)、「茆亭」(同上)があり、前者の起聯には、「剪竹誅茆就水浜、靜中還得保天真」(竹を剪り茆を誅いて水浜に就く、靜中、還た天真を保つを得ん)と言ひ、後者の起聯には、「鴛瓦虹梁計已疏、織茅編竹称貧居」(鴛瓦と虹梁は計已に疏し、茅を織り竹を編みて貧居と称す)と言っている。謙遜の辞ではあつても、彼の住まいは決して広壯なものではなかつたらう。

6 この詩について舒宝章『庾信選集』(中州書画社、一九八三)は、「知此詩当作于六十歲前後。……庾信在這首詩中抒發了自己住在郊外的一些感受和对于友情的渴慕。」と言っている。

7 出典と考えられる、王定保『唐摭言』卷一〇に引くこの句には、「花」の字がない。『唐詩紀事』卷六六、及び『全唐詩』に従つたが、『唐摭言』が原型かもしれない。

8 『唐摭言』は、「雲」を「瘧」に作る。

9 『唐摭言』は、「桀非堯」を「紂非舜」に作る。

10 『唐摭言』は、「勝」を「欺」に作る。

11 『唐摭言』は、「白」を「騎」に作る。

12 彼の生年を、『四庫全書總目』卷一六六は理宗の紹定元年(一二二八)とし、『全宋詩』卷三五二三は一二二七年とする。

彼には詩題に干支を含むものがあつて、自身の年齢にも言及しているが、この干支には若干の誤りが含まれている結果としてこのような誤差が生じたものであらう。

13 このほか、明の沈周には「六旬自詠」(『石田詩選』卷六)があり、起聯に「自是田間快活民、太平生長六經旬」(自ずから是れ田間、快活の民、太平に生長して六たび旬を経たり)と言う。『明史』本伝に、「文舉左氏、詩擬白居易・蘇軾・陸游、字仿黃庭堅、並為世所愛重。」(文は左氏を摹し、詩は白居易・蘇軾・陸游に擬し、字は黃庭堅に仿い、並びに世の愛重する所と為る。)と言うから、六旬を六〇歳の意で用いるのも、白居易に倣つたものかもしれない。